



グローバル交流セミナー・サマーセミナー

赤城合宿研修

実施日：平成30年9月29日～30日

実施場所：国立赤城青少年交流の家（群馬県前橋市）

報告者：医学部 保健学科 看護学専攻1年 星野 有香



1. 概要

国立赤城青少年自然の家を会場とし、1泊2日の間、各種ガイダンスのほか、留学体験発表、ゲスト学生による講演会、先輩学生やゲスト学生との交流などを通してGFL活動について知り、今後の活動に係る情報収集やモチベーションの向上を目的としている。

主に1～2年生対象の行事でそれ以外のGFL上級生の希望者、各講演者（ゲスト学生）も参加した。1年生同士でも、また他学年とも初めて顔を合わせる場であり、学年を通して交流を深めることができた。

2. 活動内容

9/29

(1) サマーセミナーガイダンス/GFL2018ガイダンス/留学体験発表 (図1)

GFLに関わる教職員やGFL生の紹介の後、今回のプログラムの説明を聞いた。その後、1年生は今後のGFL活動について説明を受けて各行事リーダーや各学部リーダーの決定をした。また、その間に2年生は留学体験者の発表を聞いた。一人はイタリアに1年間留学に行っていた方、もう一人はインド・ネパール周辺のマザーハウスのボランティアに行っていた方だった。それぞれ明確な目的を持って留学に行っていたり、後進国の医療について言葉の通じない中でのコミュニケーションを模索したりして、留学やボランティアに興味をもった。

(2) 学部・学科別ガイダンス (図2)

学部ごとに各研修室へ集まり、自己紹介や、先輩学生からの経験談・アドバイスを聞きながら担当する各行事リーダーを決定した。様々な経験をしている方が多く、留学費用の援助やインターンなど留学をするための秘訣を教えていただいた。

(3) 若手研究者講演会1 (図3)

大学院理工学修士2年生でスリランカからの留学生 Manimel Wadu Sahan Dulara さんに講演していただいた。Sahanさんが留学先に日本を選んだ理由からこれからの展望まで、留学についての考え方を外国人留学生からの視点で知ることができた。英語圏への留学に目が行きがちだが目的意識を持っていれば、英語圏以外の留学も視野に入ると大きく可能性が広がることに気付いた。

(4) マナー講座/短期留学プログラム説明/ゲスト学生との交流 (図4)

マナー講座では、理工学部学務係の原田さんに教授や特に学外の方とメールをするときのマナーについて教えていただいた。その後、ディーキン大学への短期留学プログラムについて説明があった。留学期間後半には学部や専攻に合わせて編成されたプログラムもあり、ホームステイと寮とを選ぶのが魅力的だと思った。その間に2年生はゲスト学生との交流をした。4名のゲスト学生がいっぱい、自分の環境や考え方に合った先輩の周りに集まり、話を聞いたり質疑応答をした。時間が20分しかなく、1人の先輩の話しか聞けなかったが、教育学部の忙しいカリキュラムの中でもその時期に留学をした行動の意義や動機を聞くことができ、非常に魅力的に感じた。

(5) 医学部企画「GFL先輩セミナー」(図5)

医学科6年のGFL生 藤本アベリー・ヒロシさんと、大学院理工学修士2年の元GFL生である塚本拓野さんによるパネルディスカッションを聞いた。リーダーやGFLについての質問に分かりやすく答えていただき、リーダーになるためのプロセスについて詳しく教えていただいた。特に医学部の藤本さんに多くの経験、失敗を紹介していただき、忙しい中でも自分のタイムマネジメント次第で留学ができること、そのためには失敗も恐れないことが大事だということ学んだ。フォローワになることで良いリーダーについて勉強し、いつかリーダーになればいいと言うことも教えていただいた。

9/30

(6) 若手研究者講演会2 (図6)

教育学部4年生の3名の方に長期留学の体験について講演していただいた。短期留学とはまた違った充実感、目的意識を知った。自分で興味がある講義を英語で受けたり、短期留学とは違って自由な時間も多いため週末に旅行をしてみたり、サークル活動に参加したり、より積極的に動くことで得られることが多いのが長期留学なのだと感じた。

(7) BBQを通じた交流 (図7)

学部学科関係なく8人程度のグループに分かれ、役割分担をしながら交流を深めた。他学部の様子を知る良い機会になった。

日時	行程
9/29	
9:40	国立赤城青少年交流の家に到着
10:00～11:20	サマーセミナーガイダンス
11:20～12:00	GFL2018ガイダンス/留学体験発表
12:00～13:00	昼食
13:00～14:00	学部・学科別ガイダンス
14:15～15:00	若手研究者講演会1
15:15～16:15	マナー講座/短期留学プログラムの説明/ゲスト学生との交流
18:15～18:55	夕食
19:00～20:00	医学部企画「GFL先輩セミナー」
20:00～22:00	学生自主活動(交流)
23:00～	就寝
9/30	
6:00	起床
8:00～8:40	朝食
9:00～9:55	若手研究者講演会2/GFL生自主企画活動の紹介
10:30～	BBQを通じた交流 退所

表1 スケジュール



図1 GFL2018ガイダンス



図2 学部学科別ガイダンス



図3 若手研究者講演会1



図4 ゲスト学生との交流



図5 GFL先輩セミナー



図6 若手研究者講演会2



図7 BBQを通じた交流



図8 集合写真

3. 総括・謝辞

今回はGFLの先輩方や教授陣と会う初めての機会だったので緊張していたが、学部や学年関係なく多くの方々と交流を深める良い機会となった。また、講演会やガイダンスを通してこれらが本番だと引き締めると同時に、先輩方の活躍を聞いて心機一転、これから奮起していこうと思える機会になった。

最後に今回のサマーセミナーに向け準備してくださった先生方、上級生の方々、事務職員の皆様、講演をいただいた方々、会場・食事等を提供してくださった国立赤城青少年交流の家のスタッフの皆様に感謝申し上げます。



僕たちはまだ、世界を1ミリも知らない

特別講演会

実施日：平成30年1月9日

実施場所：群馬大学昭和キャンパス 新棟2階 ミレニアムホール

リーダー：医学部 保健学科 検査技術科学専攻1年 兼平裕貴

講演者：株式会社スクールウィズ 代表取締役 太田英基氏



Gunma University

1.概要

本講演会では、日本人の海外留学を推進し、世界を舞台にご活躍されている、**株式会社スクールウィズ代表取締役太田英基様**をお招きし、「**僕たちはまだ、世界を1ミリも知らない**」という題目で講演をいただいた。

若くして多くの国々を周り、膨大な経験を積んでこられた太田様のお話は大変ためになるもので、将来国際的な場に出て、主体的に活動を行う事を目指す我々が学ばなければならない点が多くあり、とても貴重な経験であった。

ご講演の依頼は担当の川島先生、群馬大学の事務の方々にご協力いただき、太田様とメールのやりとりを行い、講演を引き受けていただいた。詳細な時間、会場、備品の準備、広報用ポスター(図1)やアクセスマップの作成、発信を行った。また、医学部1年GFLメンバーとも情報交換を行い講演会の進行が滞りなく進むように準備をした。



図1 学内広報用ポスター

2.講演内容

・学生時代に行うべき事

学生時代、英語はとりわけ得意ではなかったのだが、会社を経営したいという気持ちは大学生時にはあった。そして、大学2年生時にビジネスプランコンテストにおいて最優秀賞を獲得され、仲間と共に株式会社オアシヤナイズを企業する。

太田様が学生時代に我々がやるべき事として以下にあるように挙げられた。

やりたい事を見つけたときのための努力・経験を身につけることを強調された。誰かが作ってくれた機会を利用するのは三流であり、自分で企画し実行することが必要であると話された。

〈学生時代にやるべき事〉

- やりたいことを探し続ける
- 知らない世界を知る
- 自分の実力をつける
- 挑戦からの成功・失敗を経験する
- プログラミング・WEBリテラシー
- 本気のインターンシップを行う
- 英語、留学(休学)



図2 講演会の様子



図3 質疑応答の様子

・世界を舞台にするには

将来どのような人間になりたいかという「Future」を常に考えて過ごすことが大切であり、そのためには「**Must+Want=Best**」という方程式を意識するという事をおっしゃっていた。具体的に、将来世界で活躍できる人間になりたいという「Future」があるならば、「Must」は語学力をつける・世界に友人を作る・世界を知る事であり、「Want」は世界一周旅行、といった具合に考えて計画を組んでいくことが重要である。

世界とつながるためのものは様々な存在しており、その選択肢も複数ある。例えば国内外資系企業、インバウンド産業、海外現地採用など多数提示された。そのように世界とつながり、世界を舞台にできる人というのは、決して特別な能力が必要なわけではなく、**柔軟性と臨機応変力、他を許容する力**、英語を含めた**コミュニケーション能力**が必要であると話された。

・日本と世界

現在の日本はサービスやプロダクトと言った「モノ」はまだしも、営業やマーケティングなどの「ヒト」が世界に比べて劣っているという。そのため人材難に悩まされている日本であるが、海外に目を向けると、世界では、日本よりも遥かに多くの学生が世界のどこかで働きたいと考えており、グローバルな視野を持っている。

この状況に太田様は、「**頭の中の日本地図を世界地図に塗り替える**」という言葉を残した。今まで日本国内でしか見て考えなかった事を、視点を切り替え、世界に目を向け考えるともっと面白いことがあるかもしれない、様々な新たな可能性が生まれるかもしれないのだと話された。

3.総括

講演会を通して感じたのは、**何事も自発的に行動を起こさなければ何も起こらないということだ**。そしてきっかけが転がり込んでくるのを待つのではなく、自分でつかみ取りに行かなければならない、ということ強く思った。また、国際的に活躍される方の話を聞くことは、学生にとって国内志向であった考え方をグローバルな方向へ変えてくれるのではないのか。元から世界を目標に過ごしてきた学生にとっては、海外への興味関心がより深まる内容ではなかったのではないのかと思う。

私は太田様の言葉の中で「今していることが本当にやりたいことが常に自問自答する」という言葉が印象に残った。他を知る前にまず自分を知ってからでなければ物事は上手くいかない、そのために自問自答を続けることは欠かせないことではないのかと思う。

4.謝辞

この度はご多忙のところ貴重な時間を割いて講演をしてくださった太田様に心より感謝いたします。講演終了後も丁寧な学生からの質問に対応してくださった姿に大変感銘を受けました。

また、講演会実施にあたり、講師の選定から相談していただいた川島先生、講演会に関わってくださった関係者の皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。



図4 太田様との写真



英語で語る医療事情講座

国際交流

実施日：平成29年12月6日、12月13日、平成30年1月10日、1月24日
 実施場所：群馬大学医学部保健学科中央棟6番教室
 リーダー：医学部保健学科看護学専攻2年 今井里咲



概要

国際的視野を持ち将来医療に関わるために、大学院医学系研究科・保健学研究科で学んでいる留学生を通して世界の医療事情について学ぶと同時に、英語力の向上を目的として、昨年度からこの企画を引き続き行うこととした。国際センターの園田智子先生のご協力の下、留学生を講師として招待し、医学部GFL生を対象に講演していただいた。まず30分程度、母国の医療事情や留学の目的、研究内容、帰国後の母国への貢献の方法などを話していただいた。その後、質疑応答やディスカッションを通して、講師の留学生と交流した。

各回の内容

第1回：12月6日

Dolgormaa Gantumurさん（モンゴル出身）

モンゴルの人口や平均寿命などの保健にまつわる基本データから、医療の仕組みを写真や図を使って、わかりやすく説明していただいた。女性の医者の割合が多いことや、Bag Feldsherという看護師以下というモンゴル特有の医療職など、日本との大きな違いに驚いた。また、健康問題が日本と同じであるという共通点も見つけられた。

初回であったため、当日の運営に手間取ってしまい、後半のディスカッションの時間が短くなってしまった。しかし、自己紹介をしながら英語でコミュニケーションを図ることはできた。



図1) 第1回講演後

第2回：12月13日

Shrestha Shreyaさん（ネパール出身）

ネパールの地形や医療職の教育カリキュラムの図を示しながら、ネパールの医療システムや現在の医療の取り組みについて説明していただいた。難しい医療英語は、こちらの反応を見ながらわかりやすく説明してくださり、講演内容をきちんと理解することができた。

講演後は、日本にきた目的やネパールでどう貢献していくかを語ってくださって、母国の医療環境を改善していきたいという強い思いが感じられた。



図2) 第2回講演の様子

第3回：1月10日

Sangeeta Kakotiさん（インド出身）

インドからの留学生はなかなかいらっしゃらないということで、園田先生に紹介していただき、講演していただけることとなった。今までの講演で学んだように田舎と都会の医療格差がインドでも問題視されているようだ。だが、それに対する取り組みは国によって様々であることが分かった。また、インドにもASHAという患者とSub centerという日本で言う診療所のような場所をつなぐ役割を持つインド特有の医療職があるようで、とても興味深かった。

講演後には、日本の過疎地域の医療を説明しながらインドの医療と比較し、学びを深めた。インドを訪問したことがあるGFL生の経験も共有しながら、インドの医療事情についてディスカッションを行った。



図3) 第3回講演後

第4回：1月24日

Nova Sumihartiniさん（インドネシア出身）

急遽Novaさんに講演していただくこととなったが、わかりやすい講演を準備してくださった。他のGFL生にも協力してもらい、講演していただくことができた。

インドネシアは島がたくさんあるため、船の上の病院があるというお話がとても印象に残った。その国の環境に合わせ医療も臨機応変に対応していくべきなのだと思う。（岡田実樹）

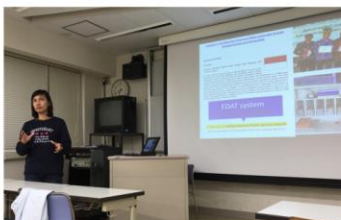


図4) 第4回講演の様子

総括と今後の展望

国際センターの園田智子先生のご協力によって、4回それぞれ別の国の出身の留学生を招待することができ、様々な国の医療事情を学ぶことができた。また、英語で講演を聞いた、英語を使ってディスカッションをしたことで、英語力の向上という目的を達成することができた。留学生とコンタクトをとったり、講演内容について話し合ったりと、講演以外にも英語を使う機会が多く、よい経験となった。

インターネット上だけでは学べない内容が学べ、普段交流する機会が少ない医学部留学生とのいい交流の機会となるため、来年度も引き続き行ってほしい。また、その際は広く参加者を募集してほしい。

最後に、企画を実行するに当たって協力してくださった園田先生をはじめとする国際センターの皆様、講演してくださった留学生の皆様、医学部保健学科教務係の皆様、大学院保健学研究科川島智幸先生、大学院医学系研究科霞田明弘先生に、心より感謝申し上げます。



グリフィス大学看護研修 海外看護研修プログラム

実施日：平成31年3月23日～平成31年3月31日
実施場所：Griffith大学（オーストラリア・クイーンズランド州）
発表者：医学部 保健学科看護学専攻2年 岡田実樹



概要

オーストラリアの医療・看護事情について学ぶとともに、学生間の交流を通して国際的な視点をもち看護の視野を広げ、看護研究と臨床看護の融合に関する基礎を学ぶことを目的とし、以下の点を目標に掲げ、事前事後学習および研修を行った。

- 目標：
 - ・看護の視野を広げる。
 - ・国際的・文化的な視点から、日本の医療や看護について俯瞰する。
 - ・臨床における研究活用について理解する。



世界地図
http://www.sekaichizu.jp/atlas/oceania/country/map_800p/p800_australia.html
(参照日2019年2月3日)

研修スケジュール(図2)

3月23日	成田空港集合、オーストラリアへ出発。
24日	ブリスベン空港到着、ゴールドコーストへ移動。
25日	グリフィス大学初日。学校案内、オーストラリアの紹介。
26日	グリフィス大学2日目。授業体験。
27日	グリフィス大学病院見学。
28日	グリフィス大学4日目。英語でのプレゼン発表。
29日	グリフィス大学5日目。血圧測定、心臓マッサージ体験。
30日	オーストラリア観光、ブリスベン空港から日本へ出発。
31日	成田空港到着。



図1 グリフィス大学ゴールドコーストキャンパスの位置

School of Nursing and Midwifery Program for Global University 25-29 March 2019									
Thursday, 28 March	8:00am - 8:30am Registration in Nursing Session 1 G15, 1-12 (Please meet outside G15, 1-12 at 8:00am)	9:00am Explore campus	10:00am - 11:00am Lecture in Clinical Nursing: Post-Primary G15, 1-12	11:00am Lunch	12:00pm - 1:00pm Lecture in Clinical Nursing: Post-Primary G15, 1-12	1:00pm Lunch	2:00pm - 3:00pm Explore Australian Culture	3:00pm - 4:00pm Explore Australian Culture	4:00pm - 5:00pm Explore Australian Culture
Friday, 29 March	8:00am - 8:30am Registration in Nursing Session 2 G15, 1-12 (Please meet outside G15, 1-12 at 8:00am)	9:00am Explore campus	10:00am - 11:00am Lecture in Clinical Nursing: Post-Primary G15, 1-12	11:00am Lunch	12:00pm - 1:00pm Lecture in Clinical Nursing: Post-Primary G15, 1-12	1:00pm Lunch	2:00pm - 3:00pm Explore Australian Culture	3:00pm - 4:00pm Explore Australian Culture	4:00pm - 5:00pm Explore Australian Culture
Saturday, 30 March	8:00am - 8:30am Registration in Nursing Session 3 G15, 1-12 (Please meet outside G15, 1-12 at 8:00am)	9:00am Explore campus	10:00am - 11:00am Lecture in Clinical Nursing: Post-Primary G15, 1-12	11:00am Lunch	12:00pm - 1:00pm Lecture in Clinical Nursing: Post-Primary G15, 1-12	1:00pm Lunch	2:00pm - 3:00pm Explore Australian Culture	3:00pm - 4:00pm Explore Australian Culture	4:00pm - 5:00pm Explore Australian Culture
Sunday, 31 March	8:00am - 8:30am Registration in Nursing Session 4 G15, 1-12 (Please meet outside G15, 1-12 at 8:00am)	9:00am Explore campus	10:00am - 11:00am Lecture in Clinical Nursing: Post-Primary G15, 1-12	11:00am Lunch	12:00pm - 1:00pm Lecture in Clinical Nursing: Post-Primary G15, 1-12	1:00pm Lunch	2:00pm - 3:00pm Explore Australian Culture	3:00pm - 4:00pm Explore Australian Culture	4:00pm - 5:00pm Explore Australian Culture

図2 グリフィス大学研修中時間割

主な活動

<授業>(図3 図4)

グリフィス大学の看護学部の1年生の授業に参加した。効果的なコミュニケーション、オーストラリアの看護について、解剖学などの授業を体験した。

<病院見学>(図5)

調理場、スタッフの休憩室、リハビリテーション室、産婦人科病棟、救急科を見学した。産婦人科病棟では病室のほかに分娩室も見学した。

<演習授業>(図6)

手指衛生、血圧測定、心肺蘇生法の演習を行った。

<演習授業>(図6)

演習室は実際の病棟のような作りになっており、ナースコールなども実際に使えるようになっていた。臨床に近い状況で演習を行うため、働き始めてすぐに臨床に慣れることができる。また、演習は患者が苦しんでいるところを見つければそこからその対処までを連続的に行うことでより臨床に近い演習ができるという。

<授業の様子>(図3 図4)

授業は少人数のグループワーク中心のものや大人数の講義のものがあり、ほとんどの学生がPCを使用し授業を受けていた。講義の資料や教科書のデータがPCに入っており、重い参考書を持ち歩く必要がないようだ。グループワークでは積極的に意見交換が行われていたが、特に印象的だったのが質問や問題に対して正しい答えを導くというよりは自分の意見を述べている学生が多かったということだ。また、考えたことを言うだけでなく、どうしてそう考えたのか理由をきちんと述べる学生が多かった。

<病院見学>(図5)

日本の病院に比べ、壁紙や看護師の服など白以外の色が多い印象があった。また、産婦人科病棟では、出産後旦那さんも泊まれるようにそれぞれの病室がダブルベッドになっていることに驚いた。スタッフルームにはモニターがあり、ICUなどの患者のバイタルなどがリアルタイムで表示されており、休憩中でも異常があればすぐに確認できるようにになっていた。

総括

授業や、演習の様子、病院施設を見学させていただき、日本での授業や演習、病院の様子との違いを知ることができた。特にオーストラリアで行われているベッドサイドでの申し送りの話を聞き、申し送り患者自身が参加することで、患者がチーム医療のチームの一員なのだ意識することができ、患者を中心としたチーム医療の実践を徹底しているのだと感じた。また看護研究が積極的に臨床で活かされていることの代表例だと思った。私は今まで臨床で活かされている看護研究について意識することがなかったので、今後は日本の臨床で活かされている看護研究についても目を向けたいと思った。また、今回のオーストラリアでの学びを今後の学習へ活かしていこうと思った。



図3 大学での講義の様子



図4 グループワークの様子



図5 モニターのある休憩室



図6 演習室の様子

謝辞

今回の研修を指導・引率をしてくださった岡 美智代先生、辻村 宏美先生、グリフィス大学の先生方、学生の方々、スタッフの方、グリフィス大学プライベート病院の施設の方々をはじめ、研修に携わってくださったすべての方に感謝申し上げます。このような素晴らしい経験をさせていただきありがとうございました。



インテンシブイングリッシュ(医学部)

外国人教員による特別プログラム

実施日：平成30年5月29日～平成31年1月8日
 実施場所：群馬大学昭和キャンパス 保健学科中央棟6番教室
 リーダー：医学部 保健学科 看護学専攻 2年 小野寺美波
 医学部 医学科 2年 川口咲季(副)
 講師：群馬大学非常勤講師 メアリー・渋谷先生



1.概要

このプログラムは医学部GFL2年生を対象とした、外国人教員による特別プログラムである。グローバル化が進むこの時代、国内外で活躍する医療者を目指すため、基本的な英会話のスキルと共に英語で意見を発信する力と医療分野の専門英語を学ぶことを目的とし、非常勤講師のメアリー・渋谷先生をお招きし、講義をしていただいた。

2.内容

スケジュール

5/29(火)、6/5(火)、6/6(水)、11/13(火)、1/8(火)

1回に2コマの講義(18:00～19:30、19:40～21:10)を全5回行なった。

1コマ目はメアリー先生の講義、2コマ目は学生のプレゼンテーションという流れで行われた。当初の予定では、前期に5回の講義を行うことになっていたが、日程が合わなかったため、前期と後期の通年でインテンシブイングリッシュを行うこととなった。

プレゼンテーション(一人一人の内容)

毎回の講義で、一人ずつサイエンス・医療分野について自分がプレゼンテーションしたいテーマを考え、発表した(写真1)。5回の講義の中で、一人4回のプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの内容は、医療分野の発表をする学生が多かった。特に自分の専攻する分野に関連する内容や、専攻ごとの講義で学んだ内容が多かった。例を挙げると、「男性の看護師」「無痛分娩」「インフォームドコンセント」である。そして、サイエンスをテーマにしたプレゼンテーションは、「西アメリカの地理」である。また、4回のプレゼンテーションのうち1回は夏休みにどのようなことをしたのかを発表した。

発表後、メアリー先生から講評(写真2)と質疑応答をしながら5～10分程度のディスカッションを行った。質疑応答では、プレゼンテーションのテーマを選んだ理由や何が一番大切だと思うか、どうすれば問題解決ができるかなどの質問が出た。このディスカッションの時間は、自分のテーマについての理解を深めるとともに、学生の意見を発信する力を養うことができたと思う。メアリー先生はディスカッション中、発表者の言いたいことをまとめたり、補足説明をしたりして私たちの理解が深まるよう、サポートしてくださった。



写真1
プレゼンテーションの様子

写真2
プレゼンテーションの講評



講義内容

第1回目は先生と学生の自己紹介、そして子供時代のこと、大学で何を勉強していて、将来何になりたいのかの3つを、一人一人が発表し、それに対しての先生の質問に答えたり、学生がコメントをしたりした。先生と学生のコミュニケーションを通してお互いの好きなことや夢を知ることができた。

第2回目、第3回目は正しい英文について講義していただいた。「話す」英語と「書く」英語は違うもので、丁寧な「書く」英語を具体的な文章を例に学んだ。普段使っている英語はくだけたもので、省略された文章を作っていることもある。例えば、論文に置いて、男性の患者さんのことをman patientという言い方はしない。male patientが一般的なものである。一見間違いない単語でも、単語によって正式な文書においては使ってはいけないものもあることを学んだ。

第4回目は医学研究を医療英語の解説と共に学んだ。唾液の役割や歯の病気についての研究を例に講義していただいた。初めて見る単語がたくさんあり、始めは理解することが難しかったが、メアリー先生の解説後は理解できるようになった。医療で使われる単語を知っておくと、一見難しそうな研究論文も読むことができるようになったので、学生たちのモチベーションが上がった。

第5回目は第1回～第4回までの振り返りを行った。このインテンシブイングリッシュで何を学んできたのかを再確認することができた。また、学生発表の全体の講評をしていただき、4回のプレゼンテーションを通して、プレゼンテーションの内容を学ぶだけではなく、効果的なスライドの作り方、発表時の話すスピードやボディランゲージも学ぶことができた。



写真3 集合写真

3.まとめ

感想・今後の展望

今回のインテンシブイングリッシュを通して、自分の意見を発信する力をつけられたと思う。普段の講義ではなかなか体験できないプレゼンテーションや講義中の発言など、多くの貴重な新しい体験をすることができた。学生が9人という少人数で行われたことで、発言、発表しやすい環境だったと感じた。学生同士も、人の良いところを次の発表で自分も取り入れてみるなど、互いを高め合うことができた。今後の講義や研究で、今回鍛えた「発信する力」を活かしていけるよう、日々精進していきたいと思う。

謝辞

お忙しい中、私たちの興味・関心に合わせて授業を展開してくださったメアリー・渋谷先生を始め、いつもこのプログラムを気にかけてくださった大学院保健学研究科川島智幸先生、齋藤貴之先生、大学院医学系研究科鯉淵典之先生、霞田明弘先生、そして原田さんを始めとする事務の方々へ感謝を申し上げます。普段の学校生活の中で、専門分野について英語でプレゼンテーションする機会はありません。とても貴重な経験ができました。このプログラムで得た知識や経験、自信をこれからの学校生活や海外での活動で活かしていきたいと思っています。

We are very thankful to Mrs. Mary Shibuya for giving us her amazing lectures, and also thankful to Dr. Kawashima, Dr. Saito, Dr. Koibuchi, Dr. Yoshida and administrative staff including Ms. Harada. In our regular school life, we seldom have the opportunity to present on medical topics in English. We had valuable experiences through this program. We would like to make the most of the knowledge, experiences and confidence we gained in this program in our future school life and activities abroad.



ベトナム・タイ海外ボランティア活動

海外ボランティア

実施日：平成31年2月14日～平成31年3月5日

実施場所：ベトナム(ハノイ)、タイ(アユタヤ)

発表者：医学部保健学科看護学専攻2年 小野寺美波



目的

私はアジアの文化がとても好きで、文化に直接触れることができるボランティアに興味を持った。現地の人との触れ合いを通して、旅行では味わうことのできない、古くからの習慣や食事、生活を肌で感じ、支援を必要としている人に“私”が出来る支援を考え、実行することを目的とし、ボランティア活動を行った。

ベトナム(2/14～2/20)

きっかけ

日本に留学中のベトナム人の友人から、自分と同じように日本に留学を考えているベトナム人の高校生に日本語を教えてくれないかと依頼を受け、ベトナムで日本語を教えるボランティアをすることになった。

日本語ボランティア

この活動は日本への留学経験があるベトナム人が講師役となって、母校の後輩を主な対象として教える日本語ボランティア活動である。

私は大学で日本語を教えることを専攻しているわけではないので、日本語を教えるための知識は持ち合わせていなかった。しかし、ベトナムで日本語を教えた高校生は来年や再来年に留学を控えた人ばかりで、日本語の基本的な文法は身に付けていた。私が主に行ったことは、会話をして、その中で間違った日本語を直すことや、発音、話し言葉を教えた。また、漢字の書き方、簡単な文章のルール(段落や点の打ち方など、小学生レベルの文章の作り方)、作文の添削なども行った。

活動は朝8:30～12:00の午前中に行われた。生徒は、5～8人程度だった。

観光



写真1 ベトナム民族博物館



写真2 タンロン遺跡



写真3 水上人形劇場

ベトナムの食事



写真4 フォー
1杯20,000ドン(約96円)



写真5 チュー



写真6 プンチャー



写真7 パロット

タイ(2/24～3/5)

CECについて

タイでのボランティアはCEC(図1)という団体を通して行った。CECは、文化教育交流会(CECジャパンネットワーク株式会社)といい、1988年に設立された。以来、海外ボランティアプログラムを専門的に取り扱ってきた。毎年600名前後の人を海外へ派遣していて、現在はアジアを中心に合計16カ国への短期・長期海外ボランティア派遣を行なっている。



〒110-8555 東京都港区赤坂1-10-1
http://www.cec.net/ (Eメール: 2015/04/15)

図1 CECロゴマーク



図2 タイの地図

ワットサケオについて

アユタヤ(図2)の町から車でおよそ30分程度北に位置する場所(Angton地域)に1737年アユタヤ王朝末期に設立されたWat Sra kaeow 寺院がある。現在この寺院はタイでも最大規模の孤児院や、恵まれない子供達のための学校を運営している。総勢およそ1200名の子供達がこの学校で勉強していて、また、同じ敷地内に保育園があり、約250名の幼児がここで保育されている。

活動

中学生から高校生までの生徒の日本語クラスに入り、先生のサポートと日本文化(習字、折り紙、手遊び)の紹介を行った(写真9・10)。また、お寺での配膳、そして保育園で園児と触れ合うことも行った(写真11)。中高生は英語が通じる生徒も多く、コミュニケーションは難しくなかった。しかし、園児はタイ語で話しかけてくるので、簡単なタイ単語を覚えてコミュニケーションを取った。

授業の中で生徒がタイダンスを披露してくれたことが印象に残っている。



写真8 ボランティア寮



写真9 日本語の授業1



写真10 日本語の授業2



写真11 保育園の昼食



写真12 昼食

07:00	起床
07:30	朝食
08:30～	午前の授業
12:00	昼食
13:00～	午後の授業
17:00	帰宅
18:00	夕食
22:00	就寝

図3 1日のスケジュール

周辺の観光地



写真13
ワット・マハータート



写真14
象



写真15
ニューハーフ
ショー



写真16
ワット・
プラケオ



写真17
ワット・アルン

今後の展望

この2年間で4カ国に行き、ボランティア活動をしてきた。全体的に福祉系のボランティアが多く、そこで私は日本語も英語も通じない環境の中で、片言な現地の言葉とジェスチャー、そして笑顔のみでコミュニケーションを取る術を身につけられた。現在、私は看護学専攻で看護学を学んでいる。最近専門性の高い講義が多く、臨床で行われている技術も習得しつつある。この学びを海外でのボランティア活動で活かしていくことがこれからの私の目標である。海外への医療支援を行っている団体を通して、今私が学べる、限られた環境の中での医療技術を学んでいきたいと思います。



English Café@Showa

昭和キャンパスによる特別プログラム

実施日：月曜日、木曜日 12:15～12:45

実施場所：群馬大学昭和キャンパス 共用棟7階国際推進室、共用棟5階リフレッシュルーム

リーダー：医学部医学科2年 高野 彩佳/医学部保健学科検査技術科学専攻2年 池田 琴音

発表者：医学部保健学科検査技術科学専攻2年 池田 琴音



概要

留学生や先生との交流の場として昨年度から大学院保健学研究科の齋藤貴之先生と学生主体で運営されているプログラムである。普段英語を使う機会の少ない医学部生の英会話のスキルを向上させたり、留学経験のある人たちが今後留学を考えている人たちの情報共有の場にもなっている。

2018年度は月曜日と木曜日のお昼休みに開催されていたが、2019年度のEnglish Caféでは前期は火曜日と金曜日、後期は月曜日と金曜日に開催予定である。

昨年度は外部からの講師として、Deanna Clause先生、留学生の講師としてFacilitatorとしてShreya Shresthaさん、Larasati Marthaさん、Suman Shresthaさん、Dolgormaa Gantumurさん、Enkhgerel Nyamdavaaさん、Nova Sumihartiniさん、Oh Kwan Eeさん、Abdallah Mshatyさん、Dam Thuy Trangさん、Enkhtuvshin Khorolgaravさんに、ご協力いただきました。

活動内容

2018年度のEnglish Caféでは月曜日にDeanna先生にお越しいただき、テーマを決めてフリートークをしたり、人数が多いときは複数のグループに分かれて会話したりした。フリートークのテーマはその日によって異なり、夏季休暇明けには休み中に何をしたか、どこへ行ったか、今までに行ったことのある国はどこか、またその国はどんな国だったか、など様々である。木曜日は留学生講師と英語でゲームを行った。お昼休みということで昼食を取りながら参加したり、お菓子も用意されていたり、よりCaféらしい雰囲気が出てきている。よりCaféらしい雰囲気を追求したのは、カジュアルな雰囲気ということで初めて来た人や初心者でも気軽に参加できる環境にすることが狙いである。さらに、昭和キャンパスのEnglish CaféはBasicとIntermediate、Advancedの3クラス(図1,2)に分かれているため、初心者から中級者、上級者まで参加しやすい環境が整っている。15人前後の人たちが参加している。

これまでのEnglish Caféイベント

7月・・・Welcome Party

English Caféに来てくれている人たちの親睦を深め、気軽に英語を話せる環境づくりや多くの学生に興味を持ってもらい参加者を増やすために開催した。オードブルやお菓子、飲み物を用意し、このパーティーでEnglish Caféの参加者や興味のある人などが知り合うことができ、その後のEnglish Caféの参加者を増やすことができ、運営側の目的を十分に達成することができたと感じている。

10月・・・Halloween Party(図3)

留学生、学部生、院生みんなでゲームや仮装をしたり英語で会話したりして盛り上がった。開催場所は食堂だったため、授業が終わってすぐ参加できるように事前に飾りつけや受付、仮装アイテム、お菓子、食べ物も準備しておいた。ゲームでは最後に景品も出て、白熱して盛り上がった。ゲームのチーム分けもゲームで留学生と日本人が混ざるようにしたため、話しやすい環境を作ることができた。

12月・・・Christmas Party

様々な国のクリスマスの過ごし方をテーマに話し合ったり、フリートークをしたりして楽しんだ。English Caféで既に知り合っている人や仲良くなっている人も多く、会話がすぐに盛り上がっていた。

4月・・・Sports Day(図4)

新入生にEnglish Caféの存在を知ってもらい勧誘するため、さらに新体制になったEnglish Caféの参加者の親睦を深めるため開催された。バスケットボールやフットサル、風船バドミントンなど大勢で楽しめるスポーツを中心に行った。一緒にスポーツをして白熱することでより一層仲良くなり、自然と会話をするようになった。

このほかにも、大学院生の国際学会報告会、トビタテ留学ジャパンの説明会、ワシントン大学やバジャジャラン大学の留学生のプレゼンテーションなど多様な企画も行っている。



図1 Basic, intermediate classの様子



図2 Advanced classの様子



図3 Halloween Partyにて



図4 Sports Dayにて

まとめ

私はこのEnglish Caféに参加することで英語力の向上や留学生との交流だけでなく、今まで関わることのなかった日本人学生たちとも多く関わることができた。英語に関わる機会の少ない医学部の昭和キャンパスでこのEnglish Caféのように英語を使う機会があることは、留学で慣れた英語の感覚を維持するとても有効な場であった。これからもEnglish Café@Showaは参加者のみなさんに楽しんでもらえるよう試行錯誤し、さらに活発なEnglish Caféを目指していく予定である。

日本人学生と留学生の交流やイベントを通して、英会話の向上や留学、将来の目標のために日本にいながら英語を使える環境をさらに増やしていきたいと思っています。参加お待ちしております！

謝辞

齋藤貴之先生をはじめ、講師を務めてくださったDeanna先生、Facilitatorを務めてくださった留学生の皆様、また昭和キャンパスの事務の方々、English Café@Showaの運営のためにご尽力いただき、感謝申し上げます。

ぜひチェックしてみてください！

Website : <https://sites.google.com/a/gunma-u.ac.jp/English-cafe-showa/>

Instagram : englishshowa





アイルランド語学留学体験

自主活動

実施日:平成31年3月4日～平成31年3月23日
実施場所:ICOT (アイルランド・ダブリン)
発表者:医学部 保健学科検査技術科学専攻2年 池田 琴音



概要

2019年3月4日～2019年3月23日の3週間、ICOT(アイルランドのダブリン)で語学留学。
スマート留学を仲介した。留学前は英単語帳を見返したり、映画を英語で見たりして軽く英語に慣れておくようにした。

費用

授業料・宿泊費
約20万円
飛行機代・保険代
約16万円
食費・観光費
約19万円
計約55万円

授業時間

月～金

13:00～14:30
14:45～16:15
(計3時間/日)



図1 The Spire

アイルランドを選んだ理由

- ・英語圏
- ・スーパーなどの物価が安い
- ・日本人が少なそう
- ・あまり知らない国のほうが行ったとき楽しそう
- ・気温が日本と同じくらい(若干寒い)
- ・留学の行き帰りに近くの国を訪問できる。(ベルギー、ドイツを訪問)



図2 アイルランド地図

授業内容

文法の学習を交え、スポーツ、お金、映画などのテーマに沿って単語を学習しながら進めていく。金曜日は1週間で習った内容についてのテストが実施され、残り時間は英語のゲームを行う。ゲームはチームで行うものもあり、クラスメイトと仲良くなることができた。
3月17日がアイルランドの最大イベントであるSt. Patrick's Dayであったため、その前の金曜日は学校でパーティーを行ったりクラスみんなで出かけた(図3)。アイルランドはアイリッシュパブが有名で街のいたるところにパブがありクラスで訪問した。普段の授業とは違い、クラスの友達とたくさん会話をすることができて充実した時間を過ごせた。学校で開催されたパーティーでは、フェイスペイントをしてアイルランドの音楽や踊り、言語(ゲール語)、アイルランドにまつわるクイズ、などいくつかの教室を使ってアイルランドについて様々なことを知ることができるイベントがそれぞれ開かれていたり、お菓子などを食べたりして楽しんだ(図4)。



図3 クラスメイトとおでかけ



図4 St. Patrick's Dayのフェイスペイント

シェアハウスについて

私の滞在していたシェアハウスは、2人部屋が5つ、1人部屋が1つ、の計11人が住むことができるという構成だった。私はアイルランドを選んだ理由として、日本人が少ないという理由を挙げたが、時期的にも日本人が多い時期であったらしく、ルームメイトは日本人の同い年の子であった。私が滞在中にも人の出入りは多く、退居したと思ったら2日後には新しい人が入居してくるような感じであった。入居者の出身は様々で、ベルギー、オランダ、ブラジル、アメリカ、ナイジェリアなどで、アメリカ人と日本人が多い印象であった(図5)。ヨーロッパの人たちは母国語が英語ではないのに、流暢な英語を話していて、子供の頃から日常に英語がある環境で過ごしていたことが大きく影響しているということが分かった。

シェアハウスでは自炊で、夕飯時になるとみんながキッチンに集まってきて、それぞれ料理をして一緒に食べて過ごした。私がこの留学で一番勉強になったことはこのシェアハウスに住んでいる人々と話をしたことであったと思う。シェアハウスには英語ネイティブの人や流暢な英語を話す人が多かったため、ここで話していることが一番英語に慣れるのには有効な時間であったと感じた。



図5 シェアハウスの様子

St. Patrick's Day(聖パトリックの祝日)

アイルランドにキリスト教を広めた聖人聖パトリックの命日。カトリックの祭日であり、アイルランド共和国の祝祭日である。シャムロックを服に付けたり、ミサを行ったりする。

(Wikipedia「聖パトリックの祝日」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%81%96%E3%83%91%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%83%E3%82%AF%E3%81%AE%E7%A5%9D%E6%97%A5> (参照日: 2019/05/06))

私も当日緑の帽子をかぶってパレードを見に行った(図6)。この日はアメリカから多くの観光客が訪れておりダブリンの街は人で溢れかえっていた。アイリッシュは陽気な人が多く、話しかけるとフレンドリーに写真を撮ってくれた。タイミングよくこの日にアイルランドにいたことができて本当に良かったと思った。

まとめ、今後の展望

たった3週間で学べたことはそれほど多くはないが、そこで知り合った人たちや経験したこと、英語を使って生活した日々はとても充実した時間となった。アイルランドの人はフレンドリーで陽気な人が多く、道を歩いている時にあいさつ程度の日本語を話しかけてきたり、楽しい印象だった。今回の留学を経験したことで将来海外と繋がりたいという思いがより一層高まり、これからは語学のためだけでなく、将来の仕事に関係する留学をしたいと思った。



図6 St. Patrick's DayのTemple Bar付近



AI-使わないという選択肢はない。どう活用するか？

先端研究学際講演会

実施日：平成30年11月29日

実施場所：群馬大学昭和キャンパス 保健学科中央棟4番教室

リーダー：医学部 保健学科 検査技術科学専攻2年 木下翔太

講演者：群馬大学大学院理工学府知能機械創製部門 白石 洋一准教授



Gunma University

はじめに

本講演では群馬大学大学院理工学府知能機械創製部門の白石洋一准教授を講師としてお招きして、技術の進歩が著しい人工知能(AI)・機械学習の概要、現在の状況と課題、その分野での日本と海外の違いや、医療分野におけるAIの活用方法についてご講演していただいた。近年産業のみならず人間の生活の中心となりつつあるAIについて、将来医療従事者になる私たちの働き方など無関係ではいられなくなるものとして興味を持っていた。その中で本学のAI分野のエキスパートである白石准教授の講演をGFL企画の先端研究学際講座という機会を借りる形で実現することができた。

白石准教授の主な研究テーマ
電動義手の開発
ウェアラブル中心血圧計の開発

概要

海外と日本のAI・機械学習の現状について

- ◆ 海外のAI技術、特に機械学習ツール研究では世界には追い付けないのが現状である。

米国 __GAFA (Google・Amazon・Facebook・Apple)

中国 __BAT (Baidu・Alibaba・Tencent)

日本の巻き返し策

- ◆ 現場からのボトムアップ

AIはデータが重要なキーとなり、そのデータの多くは企業、特に製造業は多くのデータを保持している。そのデータを利用してきればAIの開発は大きく進む。また、集めたデータをフリーAIツールで生かしたいが、そのツールは素人には扱いきれず投資する資金も必要のため、企業はAI開発に利用したいと思ってもフリーAIツールの導入に対して及び腰になっている。

- ◆ 実行プラットフォーム・ハードウェアとの連携

ソフトウェアの開発だけではAIは完成とは言えず、AIを利用するには膨大なCPUが必要なハードウェアの連携が必要になる。

AIや機械学習とは

AI開発プロジェクトは3回失敗するといわれているが、原因としては、①データがない②データの分析力がない③AIの開発力がないの3つが挙げられる。特に原因の9割を占めているのはデータ不足である。

しかし日本人に根本的に足りないものは、「当事者意識」である。AI開発自体に携わる人だけでなく、それを利用しようとする人やデータを提供する側など、AIに関わるすべての人々に当事者意識が足りていないのが現状である。現在、農業革命、産業革命、情報革命後の第4技術革命として、制御革命という新しい時代の波が来ている。その中で生きている私たちの生活にはAIがより身近になってきてはいることを個々人が自覚しなければいけない。

機械学習での学習の作業には1週間程度必要とされる。その作業終了後は多くのIoT機器からビッグデータにデータが反映され、特徴量などからモデルを推論できるようになる。(図1)

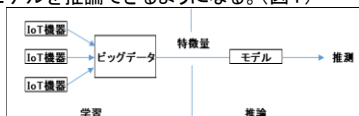


図1 機械学習を使用したモデルの推測までの流れ

機械学習の方法の一つであるDeep learningとは、十分なデータ量を使って人間なしで機械が自動的に特徴を読み取って、様々なものを認識・対応できるようになるための学習である。エラー率(誤認率)について、世界の主なAI研究チームは約26%のエラー率を出していたが、先進的なDeep learningの技術により、トロント大学のチームが15%というエラー率をたたき出した。このことから技術が大きく進み、現在は人間のエラー率である5.1%を下回り、医療の画像診断の分野に関しては2%のエラー率にまで到達することができている。

医療分野でのAIの活用

画像診断の分野において、CTやMRIによる画像に写る腫瘍を認識できるようになり、Deep learningにより感度・正確性は年々高くなっている。現在では腫瘍を約98%の確率で認識ができるようになっている。

医学・科学系の論文をより多くAIに取り込ませて、人間ではすべて読み切れない量の論文を読ませることができる。そしてAIを創薬の際の助手にして用いることで、新薬の開発を行えるようになっていく。

様々な側面からの総合的な判断は人間の方が得意であるので、人間とAI双方の長所を生かしていくことが重要である。

質疑応答(図3)

Q: 新しく生まれる仕事は？

A: AIについて教育することができるAIトレーナーやセンサーにAIを載せて、どの情報をサーバーに送るかを判断するデータサイエンティストなど、AIを管理する側の仕事は引く手あまたな状況である。

Q: 明日からAIを活用しようと思ったとき何をすればいいのか

A: まず自分のパソコンにフリーのソフトをダウンロードしてみて、自分が持っているデータを入れてみるという。

Q: 臨床医はどういうスタンスでAIのことを勉強すればいいか

A: AIトレーナーなど、その道の専門家の方々と相談して進めていければいいのかもしれない。時間のない臨床医の方々は下手に手を出すよりはプロに任せようほうがいいのではないかと。



図2 講演の様子



図3 質疑応答の様子

おわりに

AIなどの知識に疎い自分でもわかりやすいご講演をしてくださり、AIの今の現状を学ぶとともに、将来の自分の関わり方まで考えを改めさせられる講演であった。AIに関して先進国であるとは言えない日本が、世界に対して競争に加わることができるかどうかは私たちの世代にかかっている。そうした当事者意識を持たなければいけないことが再確認できた。医療の現場だけでなくすべての仕事の環境は、AIによって大きく変化していくことが予想されるので、それに対応し有効活用できるかということが、10年後、20年後に消えてしまう職種かどうかを決定づける。このため私は、最新のAIについて敏感でいることは大きなメリットであると感じた。

2045年にはAIが人間の脳を超えるシンギュラリティ(段階)に到達すると言われているが、映画などに見られるような「AIが人間を支配する」という時代は来ないというのが専門家の方々の見識である。その観点では安心できたが、自分たち人間にできることを考えていかなければいけない状況は変わっていない。またAIと人間の社会における役割の分担について未来の状況を予測して行動していかなければ、働き盛りの歳になって仕事なくなる可能性は十分にある。このため私たちが将来就きたいと考えている仕事の未来を考えることは無駄なことではないと感じた。

謝辞

講演していただいた白石洋一准教授をはじめ、本講演の企画、運営に関して助言、ご協力いただいた大学院保健学研究科川島智幸先生、理工学部学務係原田さん、保健学科教務係の皆様へ感謝申し上げます。またポスター作成や当日の運営に関して手伝ってくれた医学部GFL2017年度生の皆さん、本当にありがとうございました。



北米での語学留学

短期語学留学

実施日:平成31年2月24日～平成31年3月26日
実施場所:Toronto, ON, Canada / New York, NY, USA
発表者:医学部 保健学科検査技術科学専攻2年 木下 翔太



概要

語学研修場所 : Quest Language Studies

日程 : 2/24～3/26 全留学期間(移動日込み)
2/25～3/22 Questでの語学研修
3/23～3/25 New York

費用:約60万

- ・宿泊費・授業料 約25万(スマート留学を介介)
- ・飛行機代 約20万(直行便でなければ安くなる)
- ・滞在費(食費・お土産など) 約15万

目的:英語力の向上・Couchsurfingを活用した外国人との交流

活動内容

語学学校での生活

- 授業形態 11のレベル別
1クラス10人弱
1コマ50分 5コマ(選ぶコースによる)
- 内容 午前 レベル別授業
1人5分のプレゼン(隔週)
午後 興味のある授業を選択できる
(ex: Slung/Reality English etc...)

先生は様々な国からの移民が多く、授業以外にも現地の人と話せたり、英語でのフリートークができる機会がProgramの中に組み込まれていた。特に現地の方と話した際には、Torontoにある大学に通う自分と同年の大学生と哲学について英語で意見を交わした。日本語でも自分の意見を伝えることが難しい話題を英語で伝えるということがより一層難しく、自分とネイティブスピーカーとの英語力の差に気づかされるいい機会となった。(図1)

また、語学学校の中は英語以外話してはいけないルールになっており、日本人同士でも英語で会話することが日常になっていた。



図1 同じクラスの友達と



図2 NBAの試合の様子



図3 Casa Lomaにて

カナダでの生活

カナダではShare houseでの生活を選択したので、日本人1人、ブラジル人1人、自分の計3人での生活だった。毎日一緒に学校に通ってくれたり、食事に行ったりと必然的にコミュニケーションは英語だけの環境だったのは大きかった。

毎週金曜日に語学学校により企画されるFarewell Partyが開催されるので、積極的に参加するようになった。自身の英語を駆使して新しい友達を作ることができるのは、英語を話す機会としても様々な国の人たちの考え方などを聞ける機会としても、とても有意義だった。

週末は授業もなく、カナダでしかできないことにも積極的に取り組もうと、Torontoに近いナイアガラの滝への観光や、カナダでのスキーなど、色々なアクティビティを体験することができた。特にスキーは自分自身でも10年以上やっているのので、日本とカナダのスキー場の違いを見ることができた。

その他にも、NBAの試合観戦や伝統的な建築物の見学など、カナダならではの体験をすることができた。(図2,3)

NYでの生活

現地での観光の他に、Couchsurfingというアプリを使って他人の家に宿泊することに挑戦した。自分が宿泊させてもらったのはトルコ生まれアメリカ育ちのソフトウェアのエンジニアの方だった。日本にも住んだことがある方で、日本についても私見を聞かせてもらったり、自分が滞在した二日間ともずっと世話をしてくれて一緒にご飯に連れて行ってくれたり、観光だけでは味わえない経験をさせてもらった(図4・5)。

Couchsurfingは、宿泊させてもらえる人についての人物像や人柄は会うまでは見えないという難点はあるが、純粋に新しい友達と新しい経験をしたい人にはとても有益なツールだと感じた。



図4 NYでお世話になったEricとその友達たちと



図5 Ericと帰国前に

総括

今回の留学は自分にとって初めての一人での海外留学ということで、初日に飛行機の欠航でシカゴに足止めされて出鼻をくじかれるなどのトラブルも多かったものの、多くの面で周りの優しい友達に助けられた。また、今回お世話になった語学学校だけではなく、新しく外国人の友達や日本人の友達までもが毎日英語を話さなければいけない環境を提供してくれたことが大きく、去年のGFL企画で参加したメルボルンへの短期留学よりも「英語を話す」という点でとても充実したものになり、最終的には英語でのレスポンスの速さと質の向上などが感じられるとてもいい留学になった。また、Couchsurfingに関しても自分にとって今回の留学における大きな挑戦の一つであったが、泊めてくれたEricのおかげで不安もなく楽しい時間を過ごすことができた。

将来自分は医学分野の研究に携わっていきたくと考えているが、世界を相手にしていかなければいけない将来の自分に必要となるのは、英語の論文を読んで学ぶことだけでなく、英語での研究発表や研究仲間との意見交換することなどが挙げられるので、研究分野の勉強と並行して日本ではできない生の英語の勉強も続けていきたいと考えている。今回の留学を良いきっかけとしてこの経験を次に生かせればと思う。



図6 Statue of liberty



新興国理学療法学生と研修交流プログラム

国際保健医療研修

実施日: 平成30年9月17日～平成30年9月23日
 実施場所: モンゴル国立医科学大学(モンゴル・ウランバートル)
 発表者: 医学部保健学科理学療法学専攻2年 伊藤 裕喜



1. 概要

目的: 同じ理学療法を学ぶ学生同士が交流し、新興国の文化・情勢を踏まえたうえで保健医療や理学療法領域について理解する。

参加者: 群馬大学大学院保健学研究科教員 1名

群馬大学大学院保健学研究科博士課程前期課程 学生 1名 事前準備: モンゴルの医療制度についての学習、研修中の学生発表用
 群馬大学医学部保健学科理学療法学専攻 学生 4名 のスライド・原稿作成

2. 活動内容

3. 総括

日付	
9/17	出国 モンゴル到着
9/18	学生との顔合わせ モンゴル国立医科学大学施設見学 理学療法学科への授業参加
9/19	病院見学(図.1) 民族舞踊見学 学生との交流(夕飯&カラオケ)
9/20	病院見学(図.2)
9/21	学生との交流(ウランバートル市内の観光) 学生発表(群馬大学のカリキュラムや研究 についての発表) ホームステイ(ゲル宿泊)(図.3)
9/22	郊外での遊牧民の生活体験&観光 (片道3時間かけ郊外に移動。)(図.4.5.6)
9/23	モンゴル出発 帰国

今回の研修を通じて多くの事を学ぶことができた。病院見学を通じて、「**国によって医療に対する考えが驚くほど大きく異なるということ**」これは極めて当たり前のように考えられる事だが、文化や価値観が大きく異なるため一般市民の医療に対する考え方が日本とは大きく異なっていた。例えば、モンゴルではケガや病気になったとしても病院に全てを頼り切るのではなく、患者さんの家族や親族などができる世話は医療従事者に頼らず身内だけで解決しようとする姿勢を見ることができた。**文化や価値観の違いが医療現場に大きな影響を及ぼしている**という事実は大変興味深いと感じた。

リハビリの観点から考えてみると、理学療法士と患者さんが入院中に接する機会は極めて少なく、限られた時間の中で、患者さん1人1人に合った効果的なリハビリを進めていくことは非常に難しいのではないかと考えた。またモンゴルでは日本から理学療法という概念が伝わるまで、理学療法はもちろん十分なリハビリ自体行われておらず、現在もリハビリの存在自体がモンゴル全土に浸透していない状況で、**患者さんにリハビリの有用性を伝えていくのも理学療法士の担う役割**である。モンゴルの理学療法士は日本以上に多くの役割を担い仕事をこなしているのを感じた。

文化を知るという観点では、滞在中は現地の学生寮に入寮して現地の学生と同じトイレやシャワーを使用した。授業形態は日本と同じであり、言葉は通じないが、我々と同じような講義という事に対して親近感がわいた。学生との交流にて学生がよく通うお店に行ったり、カラオケなど同年代として楽しい思い出を作ることができた。郊外での遊牧民の生活体験ではラクダに乗るなど本の世界でしか見たことの無いような未知なる体験をする事ができた。また言葉が通じなくとも思いは伝わり、コミュニケーションはできるのだと学ぶこともできた。**交流を通じて日本との生活様式や食生活、家族観、文化や思想の違いを肌で感じる事ができ楽しく思い出となった。**



図1.病院施設

モンゴルの病院設備は旧ソビエトが使用していた物を輸入して未だに使用している。日本ではとくに使われていない物ばかりで驚かされた。



図2.病院の外観

モンゴルの首都ウランバートルの中心にある最も大きな病院の外観。スロープはあるものの、勾配が急でバリアフリー化が日本に比べて遅れている。



図3.モンゴルの伝統料理

ホームステイ先のゲルにて振舞われた料理。モンゴルの主食は、羊の肉であり、朝昼晩すべてを羊肉を食べる。日本の羊肉よりも柔らかくておいしい。



図4.ゲル内部の様子

郊外のゲル内部は意外と広く、大人が20人以上も入れるくらいの広さとなっている。中心の暖炉で来客者に多くの料理を振舞う文化がある。



図5. モンゴル郊外にて集合写真

現地の学生と片道3時間かけ郊外に行き、山登り、雪合戦、ダンス、ボール遊びをした後に撮った1枚。言葉の壁は関係なく楽しむことができた。



図6. モンゴルの郊外

郊外への観光の後に道路脇にいたラクダ。かつては重要な交通手段であったが、今は車の登場で、観光用程度にしか飼育されていないとのこと。

4. 謝辞

今回の研修において指導・引率していただいた群馬大学大学院保健学研究科の朝倉智之先生、モンゴル国立医科大学の教職員・学生の皆様、訪問施設の職員の方々に厚く御礼を申し上げます。



The reports on the ATBHIX and Healthcare Team Challenge(HCTC)



Dates: Sept. 3, 2018 to Sept. 6, 2018

Venue: Auckland University of Technology (AUT), Auckland, New Zealand

Reporter: Ono Itsushi, 3rd-year Laboratory Science Course student, Department of Health Science, Faculty of Medicine

《 I . Introduction 》

ATBHIX stands for the Ninth All Together Better Health conference. This is a conference where various professionals come together and discuss interprofessional education and interprofessional work. This conference was held at Auckland University of Technology (AUT), Auckland, New Zealand. I assisted Mr. Ogawa, principal presenter from the Graduate School of Gunma University with his poster presentation. Including Mr. Ogawa, three students and three teachers participated in the conference.

Participants in this conference came from various countries such as USA, UK, Canada, Switzerland, Australia, Denmark, Spain, Brazil, Singapore, Indonesia, India, Qatar, South Africa, and Japan. They had various professional backgrounds.



Figure1: With the conference banner

《 II . Conference 》

1. The importance of IPE

The professions of participants were varied: There were not only doctors but also nurses, pharmacists, laboratory technologists, radiologists, physiotherapists, occupational therapists, clinical psychotherapists, and surprisingly, patients. When I talked with the participants, I realized that this conference was a good opportunity for us to understand more about other professions. More specifically, I learned that the point each profession thinks important was different from profession to profession. I also learned that different support or different care for one patient can result from local culture, for example, the influence of the Shaman

2. The trend of IPE all over the world

After learning about the situations of IPE in several countries, I realized that progress of IPE was different in each country. Some countries already built hi-quality IPE programs, and other countries were still trying to start one.

In an Asian country, it was reported that female nursing students and male engineering students got together and learned IPE. Surprisingly the program started on the Valentine's day. Chocolate helped them to build good relationship. In each country, they make IPE programs that will suit their cultures.



Figure2: With one of the invited speakers



Figure3: After the competition of HCTC



Figure4: A classroom at AUT

3. English, as a tool to communicate

What I was shocked in the conference was that all participants used English skillfully even though their mother tongues were not English. It seemed to me that participants from the Southeast Asia, South America or even from Africa treated English as one of their tools to communicate. We Japanese tend to think too much when we speak English, which I think makes it difficult for us to speak fluently. I thought this is our bad habit.

When I joined the Healthcare Team Challenge (HCTC), I faced the barrier of the language. The students from New Zealand spoke too fast for me to understand. I struggled to exchange opinions with them about health care.

This was my issue and I tried to get an opportunity to speak in English.

《 III . Impression 》

What I learned most in ATBHIX was that I should try to brush up my language skills to express my opinion to the world as well as to understand the present situation of IPE. I need to change my situation from "just speaking English" to "using it as a tool of discussion." In addition, the attitudes, learning space and atmosphere of students were totally different between AUT and Gunma University. Especially, I thought NZ was ahead of Japan in the field of information technology because there was an official app for ATBHIX.

I think we should accept what we felt great or convenient in other countries and start using them.

《 IV . Conclusion 》

I had nice experience of struggling with my English in ATBHIX and in HCTC. I felt the tide of IPE in the world directly and I got good friends who were studying for various kinds of medical professions. Finally, I'd like to say thank you to Prof. Lee, Dr. Kawashima, and Dr. Tokita for their assistance. What is more, I appreciate the help provided by my fellow SIPEC members, Mr. Ogawa and Miss Shimizu.

4. The atmosphere of AUT

The atmosphere of this university was totally different from the atmosphere of Japanese universities. Almost all signs were written in Māori and English. The microphones in large classrooms or lecture rooms were shaped like dice. Thanks to this shape, it was possible to pass the microphone to questioners staying far from the front stage. Moreover, there was a huge classroom like one whole floor and the room was connected to the street directly.

At the opening ceremony, we saw a welcome dance of Māori performed by a student group which tried to maintain Māori culture. I realized that all of the residents in Auckland respect Māori culture, and I felt this attitude formed part of the atmosphere of the town.

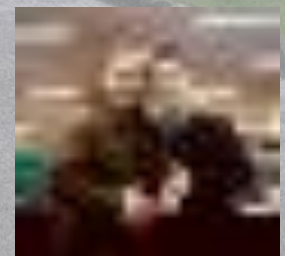


Figure5: with a keynote speaker from University of Otago Wellington